KOMAZAWA 駒澤大学 1 ― 3 流通経済大学 RYUTSUKEIZAI

首位決戦に完敗・・・。後手に回っ

首位陥落の要因は…

サッカーにおけるボールを奪われた後の攻守の切り替えは大きく分けてふたつ、一度自陣にリトリートして相手の攻撃に対応するか、即座にプレスをかけて高い位置からの攻撃を目指す方法がある。駒大の戦術は間違いなく後者だが、この首位決戦では最後まで「らしさ」を見せられなかった。

伏線はあった。「もっといけるところで止まってしまった」(山崎)ことに、警戒していた**難波**が最終ラインと中盤の間のスペースから楔のボールを2列目、サイドへとつなぐ流経大のスピーディーなサッカーが重なり、駒大の歯車はなかなか噛み合わない。先制される直前にはDFの間に抜けられたプレーから波状攻撃を受け、同じく追加点を浴びる2分前の30分にはサイドから中央、そこからスルーパスを通され**難波**が飛び込むあわやのシーンもつくられている。ボランチがサイドのカバーへまわっても開いたスペースを使われ、中央へチェックにいけばその逆、といったように後手を踏んでしまい押し込まれる場面が目立った。そのため、DFラインを下げざるを得なくなった駒大は、密着マークに苦しんでいた**巻**へのサポートが遅くなり、攻撃の停滞へもつながる悪循環に陥ってしまった。「守り方を考えていればもっと少ない人数で守れたし、高い位置でボールも取れたと思う」(**唐井**)と、相手にやらせてしまったという、自分たちのサッカーができなかったことがこの日の敗因に大きな影響を与えた。

次節は中大の3トップに対し4バックの可能性も示唆した**秋田監督**だが、形の問題ではないことは誰もがわかっている。駒大が試合に臨む上で常に最重要視してきたメンタル面の欠如に対するやりきれなさが試合後に選手の口から幾度となく聞かれた。前節からの3試合を「トーナメントのつもりで戦う」と言っていただけに、1勝1敗で迎える「決勝」では課題となった守備の修正も含め、「いい薬になった」(**秋田監督**)この敗戦を乗り越えた本来の駒大サッカーを見ることができるだろうか。

(斉藤卓也)